

モンゴル、苦楽とともに生きる伝統医療

長岡 慶*

「私は2つの時代を経験した。ひとつは社会主義の時代、そしてもうひとつは資本主義の時代だ。」

モンゴル伝統医療の研究者ボルド博士（40歳代・男性）は言った。2013年、私はモンゴルの首都ウランバートルにいた。博士は私に、社会主義の時代に伝統医療の知識の多くが失われたということ、一方で、彼自身が伝統医療に関心をもったのもこの時代であったことを語った。18歳から3年間兵役についた彼は腎臓を傷め長く痛みに苦しんでいたが、あるとき在家僧に教えられた伝統薬で痛みから救われた。当時、伝統薬の販売は禁止されていたため、彼は自ら薬草を集めて薬を作った。博士と同じ大学で伝統医療を学んだというアルタンさん（30歳代・女性）は、伝統医療が解禁された後に大学へ入学し、伝統医の資格を得た。もともと彼女の祖父は村の伝統医であったが、伝統医療の弾圧下で父は後を継ぐことができなかった。アルタンさんが伝統医を志したのは父の勧めによるところが大きいという。

宗教の武器から文化の象徴へ

モンゴルにチベット医学が広まったのは、王がチベット仏教を国教とした16世紀末のことである。モンゴルの伝統医療（モンゴル医学）は、在来の医療知識の上にさらにチベット医学の理論を取り込み、確立された。しかし、1921年の民族革命でモンゴルは社会主義国家となり、旧ソ連の影響が強まると、1937年「チベット薬は宗教活動を強める『武器』である」として伝統医療の禁止が決定された。その翌年にはすべての伝統薬の商業販売が禁止され、伝統医療は公の場から姿を消した。

しかし、伝統医療は民衆の間では密かに行なわれ続け、民主化の機運が高まる1990年代初頭に、モンゴル政府は「伝統医療開発基本方針」（1991年）を定め、続いて民主化後に「モンゴル伝統医療開発国家政策」（1999年）を制定した。これにより初めて伝統医療は公式に承認され、モンゴルの「知的文化遺産」として国家政策による伝統医療の保護・発展がめざされることになった。現在、モンゴルの伝統医療は復興の途上にあるといえる。国立・私立の伝統医学大学や伝統医学科

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

が次々に設立され、製薬工場で伝統薬の製造や品質の標準化が行なわれている。

2001年モンゴル政府は日本財団に社会開発支援を要請し、「モンゴル伝統医療普及事業」の実施が決定された。2003年「ワンセンブルウ・モンゴリアNGO」が日本財団の協力でウランバートルに設立され、多数のモンゴル人伝統医や研究者、製薬工場、政府関係者が関ることとなった。この事業は日本の置き薬の方式を採用し、9種類から21種類の伝統薬（さらに体温計、消毒用アルコール、脱脂綿、包帯、バンドエイド）の入った薬箱を各家庭に配置し、半年ごとに使用済みの薬代だけを集金して、新しく薬を補充するという仕組みで運用されている。2010年までにモンゴル全21県のうち7県、1万6,000世帯に薬箱が配置され利用されている。

草原の村へ

私は、2013年8月ヘンティ県のある村を訪れた。ウランバートルから車で5時間ほどかかるこの地域は、2006年から伝統医療普及事業が実施されている。

「サンバノー」（こんにちは）

バガ・エムチのボロルトンガラル先生（30歳代・女性）が笑顔で迎えてくれた。バガ・エムチとは1940～50年代に政府が地方の医師不足を補うために新たに資格を与えた准医師（直訳は村医者）のことで、手術以外の診療を行なうことが認められている。この地域には6人のバガ・エムチがおり、病院（近

代医学）の手伝いや、事業に参加する家々を訪問し健康チェックや伝統薬の補充、集金、事業本部が発行するニュースレターの配布を行なっている。集金したお金やその記録、補充用の薬や古くなって回収した薬などは、この地域に1軒ある伝統医療の診療所で管理され、事業本部との間でやりとりされる。ボロルトンガラル先生の案内のもと、私は病院や伝統医学の診療所のほか、村で暮らす6世帯の家庭を訪問した。

バヤサガランさん（51歳・女性）とバトサイフンさん（60歳・男性）の夫婦が暮らすゲルには手作りのチーズやヨーグルトが置いてあり、天井からは羊肉が吊り下がっていた。テレビや電話もある。三男一女の子どものうち、三男（26歳）が同居し、1,200頭以上いる家畜（ヒツジ、ヤギ、ウマ、ウシ）の放牧を手伝っている。彼らの薬箱をみせてもらおうと、ソジド（腎臓・泌尿器の不調）やマン4タン（風邪）、ノロウ7タン（風邪・滋養強壮）、シジェド6（胃痛・消化不良・食中毒）、バル10（関節痛）という伝統薬がよく使用されていた。たとえば、マン4タン



写真1 プラスチック製の薬箱に入った伝統薬



写真2 ゲルの中央に置いてある薪ストーブはモンゴルのうどんツワンを作る際に小麦粉を練った生地を焼くためにも活用される



写真3 モンゴルの草原

は土木香（オオグルマの根）、苦参（クララの根）、接骨木（ニワトコの茎）、生姜を調合した粉薬で、ノロウ7タンはマン4タンにさらに訶子、毛訶子（ともにミロバランの果実）、梔子（クチナシの果実）を加えたものであり、シジェド6は大黄（ダイオウの根茎）、訶子、土木香、山奈（バンウコンの根茎）、岩塩、天然ソーダを調合した粉薬である。薬の原料となる生薬はモンゴル北部の森林地帯や南部の砂漠地帯から調達され、インドや中国からも輸入されている。春は家畜の出産で忙しく、冬は寒さが厳しいので、バト

サイフンさんはひじや肩などの関節が痛くなり、やや太り気味のバヤサガランさんはひざが痛くなり、とくに冬は毎日肉を食べるため、胃痛になることも多いという。こうした痛みや風邪、疲れ気味のときに治療や予防のため伝統薬が飲まれている。彼らは、伝統薬が家にあることで「わざわざ町まで出かけて薬を買いに行かなくてもいいようになった」と語った。経済的にも伝統薬は西洋薬に比べて安い。しかも使用時にすぐ払わなくてもよく、集金日までお金を用意する猶予があるので使いやすいという。

ほかの世帯では、胃痛や関節痛、風邪のほか、腎臓や肝臓、心臓の不調、婦人病などにも伝統薬が使用されていた。また、多くの家庭で、家畜に対しても伝統薬が使われており、たとえば産後すぐに排出されるはずの胎盤がなかなか出てこないとき（胎盤停滞）は婦人病薬が、家畜が元気がないときには滋養強壯薬がいずれも成人の2倍の量で用いられていた。

日常に息づく民間医療ドム

一方で、モンゴルの民間医療を「ドム」といい、古くから動物の肉や毛皮、反芻物や臓器を用いた多様な治療法が知られている。私の訪れた村でも身近にあるさまざまなものが薬として日常的に利用されていた。いくつか紹介しよう。

①馬乳酒

「夏にあまり胃痛にならないのは、なぜですか」という私の問いに、チョロンバートルさん（50歳・男性）は「夏には馬乳酒を毎



写真4 夏につくられる馬乳酒



写真5 バターさん夫婦とゲル

日飲んでいるからさ」と答えた。彼は馬乳酒をどんぶり鉢いっぱい注ぎ、私や同行していたバガ・エムチに渡した。私たちはそのどんぶりを両手で受けとり口に運んだ。馬乳酒はすっぱくてアルコールはさほど強くなかった。馬乳酒は体によい飲み物とされ、落馬して骨折したり筋を違えたりしたときには馬乳酒を飲んで骨や筋を柔らかくしてつなげるといふ治療法もある。

②タルバガ

あるとき、村の青年たちと野生のタルバガ（モンゴルマーモット：*Marmota sibirica*）の肉を食べた。タルバガは村の人々にとってご

ちそうで、首を切り落とし内臓を取り除いた後、腹に拳大ほどの黒い焼け石をぎっしりと詰めて蒸し焼きにされる。青年たちはそれをさばくと、腹から熱の冷めた石をすべて取り出し互いに分け合って、めいめい自分の手に念入りにすりこんだ。「こうすると体の中にたまった悪いものが外に出ていくんだよ。」湿ってべとべとした石には、肉の焦げがつき、こすると私たちの手は真っ黒に染まった。

③人間の母乳

バターさん（43歳・男性）は家畜の世話を終えてゲルに入ってくると、懐から小さな白い瓶を出して棚に置いた。

私：「これは何ですか。」

バターさん：「ん？知人の母乳だよ。」

私：「え、何に使うのですか。」

バターさん：「母乳は馬が風邪をひいたときに飲ませるとよく効く。それに俺たちも目が風邪になったときよく使う。すぐ治るよ。」

夏の日差しや冬の雪に反射した太陽の強い光で目が痛くなったとき、それは「目の風邪」（ヌッドウニーハニャット）といわれる。目が風邪をひくと、村の人々は知人から母乳を分けてもらい、それを目に垂らすのである。

④冷泉

村周辺には天然の冷泉がいくつか湧き、その水は胃腸が痛いときに飲むと効果があるとされていた。冷泉水をすくって飲んでみるとシュワッと舌の上ではじけた。それは炭酸水で、水面を覗き込むと小さな気泡がポコポ



写真6 母乳の入った小瓶



写真7 冷泉を汲む

コと出ていた。村の青年もやってきて、ペットボトル2本分の水を汲んでいく。冷泉の周りは木の柵で嚴重に囲われ、まるで草原の中の聖域のようであった。

現代の苦楽とともに

モンゴルでは、近代医学以外のすべての医療を禁止するという時代が約半世紀もあった。しかし、その事実を感じさせないほど、村で目にした人々の生活は、多様な伝統医療

や民間医療ドムと関り合っていた。村だけではない。都市でも伝統医療の診療所に多くの人々がやってきていた。ウランバートルの寺院の中にある診療所では老人と伝統医が次のような話をしていた。

老人：「今は血圧を下げる薬（近代医薬）を飲んでます。それと子どもたちが腕の関節痛にいいと、いろいろな薬をもってきてくれるので飲んでます。チェコの薬や韓国の薬です。」

伝統医：「そんなにいろいろな薬を飲んではいけません。あなたは胆嚢がよくないので処方する伝統薬と元々飲んでいた血圧を下げる薬を飲み続けてください。でも、ほかの薬はいけません。大切な人があなたをどんなに心配して薬をもってきても、飲まないようにしてください。」

伝統医は私に、薬同士の相性を知ることの重要性を語った。

民主化後、モンゴルでは海外への出稼ぎ労働者が増加する一方で、中国や韓国からさまざまな企業が進出してきている。食習慣の変化や、海外からの医薬品・サプリメントの流入、高血圧症などの生活習慣病の増大といった現代の状況を通して伝統医療は単に過去の古き良き医療として留まらない。それは「生きた医療」として現代の苦楽とともに再構築され続けている。

職を『選ぶ』自由

—インド・ラージャスターン州における清掃人のための職業訓練事業をたずねて—

増木優衣*

インドは西部、ラージャスターン、
ジリジリと身を焦がす陽射しが容赦なく照
りつける、砂漠の国。

そんな乾燥地帯に位置する2つの街アル
ワールとトンクに、ナイ・ディシャーとい
う職業訓練施設がある。ナイ・ディシャー
とは、ヒンディー語で「新しい道」を意味
し、歴史的に社会の底辺に位置づけられてき
た人々が、新たな職業を選び、新しい生活
を送ることのできるようにとの願いを込めて名
付けられた。なかに入ると、鮮やかなスカイ
ブルーのサリーを身に纏った女性たちが、縫
製に刺繍に料理に美容にと、各々の作業に勤
しんでいる光景に出くわす。とても楽しそう
で、思わずサリーを着せてもらったり、手に
マンディーと呼ばれるタトゥーのようなもの
を描いてもらったりしていた。すると、この
真夏の暑さもここを訪れた当初の目的も忘れ
かけて時間だけが経ってしまうのだから、なん
とも不思議だ。

わたしの調査地インドには、伝統的に人間
の排泄物を集めて処理する仕事に従事して
きた、清掃人と呼ばれる人々が存在してい
る。彼らはカースト制度のなかでも不可触民

(Untouchable) と呼ばれる最下層に位置づけ
られ、同じヒन्दゥ教徒であっても、寺の
なかに入り祈ることが許されてこなかった。
上位カーストの人々とともに食事をするこ
とも、同じ池で沐浴をすることも、彼らに触れ
ることについても、同様に厳しい規則が存在
していた。それはひとえに、彼らのもつ不浄
性 (Untouchability) に由来しているとされ
る。清掃人の場合は、人糞を集めているため
に、その手に不浄性が宿っているとされ、不
可触民として扱われてきた。

2013年9月にわたしが訪れたのは、トイ
レ問題および衛生問題に対処することで清
掃人の解放をめざしている NGO が運営し
ている、清掃人のための職業訓練施設であ
る。この NGO はスラブ・インターナショナル
(Sulabh International, 以下スラブ) とい
い、1970年にバラモン階級出身のビンデシュ
ワル・パタック博士により創設された。スラ
ブは政府からの受注で、インド全域の病院や
観光地、その他の公共施設に簡易公衆トイレ
(Sulabh Toilet Complex と呼ばれる、写真1)
を設置し、1回の使用につき2ルピー (約3
円) を利用者から徴収することで、トイレの
メンテナンス費用を賄っている。スラブが展

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

開する事業コンセプトは、極めてシンプルである。それは、インドの人々、特に農村部の人々は、水洗トイレ（water closet：WC）がないために草むらや家の一角で用を足しており、その排泄物を清掃人が集めていた。しかし、水洗トイレを作って普及させてしまえば、清掃人の手を借りなくても一連の排泄過程を自分で管理することができる。また、パタック博士は、排泄物を貯めておく2つの大きな穴を備えたトイレ（写真2）を開発し、公共施設および特定の農村世帯に設置することでインドの深刻な公衆衛生問題に対処し、かつ清掃人をその仕事から解放することを実現させた。さらに、スラブはインドの4カ所に職業訓練施設を設置し、そこでは清掃人であった人々が新たな職業に従事し、収入の向

上を図っている。

職業訓練施設では、サリーやほかの女性向け衣服の縫製や刺繍（写真3）、フェイシャル・マッサージやネイルサロン、チョウミン（炒麺）やパパドゥ（せんべい的一种）作り（写真4）などが行なわれ、そこで作られた商品は、ナイ・ディシャーや近くのマーケットで売られる。特にサリーや、チュニックとレギンスを組み合わせたようなバンジャービードレスと呼ばれる女性の衣服は、細かなデザインの刺繍が施されているために高いものだで一着4,000ルピー（約6,800円）ほどで売られる場合もある。

アルワールとトンクには、現在それぞれ100人強の元清掃人の女性が訓練を受け商品を生産し販売しているが、この女性たちは清



写真1 アルワールにあるスラブの公衆トイレ



写真3 刺繍を習う女性たち



写真2 2つの穴を備えたトイレの一種



写真4 パパドゥを作る女性たち

掃人としてどのような経験をしてきたのだろうか。アルワールのナイ・ディシャーで、ひとりの女性のライフストーリーを耳にする機会を得た。

彼女、ラクシュミー（仮名）は、現在32歳で3人の子どもの母親である。結婚したのは彼女が16歳のときで、結婚後に清掃人（ラージャスターン州では清掃人はバーンギー（Bhangi）と呼ばれてきた）の仕事に従事しはじめた。初等教育も受けていない彼女は、不可触民以外のカースト（General caste と呼ばれる）15世帯の排泄物の処理を請け負っていた。朝6時に起きてそれぞれの世帯に赴き、午前11時頃にすべての排泄物とともに帰宅するという生活を送った。排泄物を集めるときは、皿のような形をした入れ物に、竹箒で排泄物を入れ、それを頭の上に乗せて家から家へと移動する。「排泄物って強烈な臭いですが、どうしていたのですか」という素朴な疑問に、彼女はストールで鼻を覆う仕草をして、「いつもこうしていたのよ」と苦笑混じりにそっと微笑んだ。帰宅したのちは、主婦として家事をする以外には寝ていたりするのみで、なにもすることがなかったという。また、ヒन्दゥー教徒が朝の礼拝に行く時間に、自分は清掃人の仕事をしなければならなかったため、祈ることもできなかった、と語った。

2003年にアルワールにナイ・ディシャーができて以降、スラブはアルワールのほとんどの世帯に例の2つの穴の簡易トイレ（Twin-pit toilet と呼ばれる）を設置した。その後、彼女はナイ・ディシャーで職業訓練を

受け、現在はテイラー（縫製）の仕事を自宅でも請け負っている。夫も、ナイ・ディシャーができる以前は、トイレ掃除や床掃除などの仕事に従事していたが、ラクシュミーが職業訓練を受け、収入向上などを達成していくなかで、自らも写真家へと転身した。

また、スラブは、政治家や著名人を呼んで、元清掃人の手によって作られた食べ物を買ってもらうなど、不可触民差別を撤廃するためのパフォーマンスを行なった。その成果もあり、現在では、より伝統を堅持する傾向にある高齢の一般カーストの人々が自らの家に元清掃人を呼んでフェイスナル・マッサージなどを頼んだり、チャイやビスケットを共食するなど、不浄とされていた彼女たちの手が、直接一般カーストの人々に触れることが可能となりつつある。以前であれば、排泄物処理の賃金は投げて渡され、水もコップではなく小さな瓶から彼女たちの手に注がれるだけであった事実からすれば、これはとてつもなく大きな社会変革であると、ナイ・ディシャーの職員は熱心に語った。

このように、スラブの活動によって、清掃人にとっての仕事や家庭や社会など、さまざまな側面からの変化を垣間見ることができたが、わたしが一番知りたかったのは、「彼女にとっての」一番の変化とは何だったのかということだったので、最後に聞いてみた。

「いまは、朝になると、子どもは学校に行って、夫は働きに出かけて、わたしもナイ・ディシャーに仕事に行くの。そんなわたしを見て、人々はわたしを尊重（respect）してくれる。それからね、（スラブの活動が表

彰される際に) ニューヨークの国連にも行ったの。アメリカよ、アメリカ。あとは、夫が協力的に家事を手伝ってくれるようになったこと。国連に行く際も、任せてと送り出してくれたの。」

開発の現場でよく使われる「エンパワーメント」という単語は、辞書上は力をつけさせることという他動詞的な意味をもっている。そのため、この言葉は人から与えられるものであり、自律的ではないという見解もある。しかし、力をつけることとなるきっかけは他者からの働きかけであるにしろ、自律的なものであるにしろ、どちらにしても力をつけた当該者がそれに対して積極的な意味を感じているのであれば、それが他律的か自律的かはそこまで問題ではないように思われる。焦点を当てなければならないのは、いま当事者がどう感じているのかに関してであり、その意味で当事者の言葉は、事実かそうでないかにかかわらず、彼らにとっての真実を示している点で極めて重要である。

彼女の言葉が示すように、ラクシュミーにとってのエンパワーメントとは、それが彼女自身によるものなのか、ナイ・ディシャーの働きかけによるものなのかは別にして、以前に比べ、コミュニティの人々から尊重されることによって、自分自身の内面に自信を獲得したことそのものなのである。

このように自信を獲得した人々が、社会とどう関り、それによってカースト関係や不浄性、さらにトイレというものに対する人々の

認識というものは実際どのように変化しているのかなど、明らかにしなければならないことは、まだまだ多くある。そのためには長期のフィールド調査が重要で、もっと多くの元清掃人と、一般カーストの人々の話に耳を傾ける必要があるだろう。特に社会的弱者とされてきた人々の経験を聞き、なにが(NGOやほかの人々も重要だが、なによりも)「彼らにとっての」真実なのかということに少しでも肉薄できる力が求められていくことをひしと感じた。

気がつくと、わたしはラクシュミーの手を握りながら話を聞いていた。10年前までは排泄物を処理していたこの同じ手で、いまはサリーを作ったり食べ物を作って売ったり、わたしにマニキュアを塗ってくれたりと、さまざまな選択肢を自由につかむための努力をすることが可能となった。職員の話によれば、アルワールとトンクでは全清掃人の解放が実現したが、まだラージャスターンのある一部の地域、そしてインド全域でも一部の地域では現在でも清掃人の仕事に従事している人々がいるのだそうである。

帰国したら清掃人に対する知識を深める必要があることをひどく感じながら、ラクシュミーにお礼を言って外に出ると、相変わらず暑い陽射しが直射で照りつけて、くらくら立ちくらみさえする。振り向くと人々が手を振ってくれて、暑さに負けずにわたしも手を振り返して、砂漠の国のナイ・ディシャーをあとにした。

出家式

—近所付き合いの確認の場—

櫻田 智恵*

ある日、タイの首都バンコクの繁華街で、私は 500 バーツを拾った。それは日本円にしてみたら 1,500 円程度の金額だが、ここでは屋台での 1 食が 30 バーツ (90 円) ほどであることを考えると、大金である。私の心は躍った。一緒にいる友人と 3 人でお茶を飲んでも、これで十分賄うことができる。おつりが出るほどだ。しかし、友人は困惑していた。

「500 バーツも落としたんじゃ、その人は困ってるだろうね…」

「お寺にタンブン (功德を積むこと) することにしよう。」

私は自身の思考を恥じた。私が私利私欲のために得ようとした金を、彼らは寺に寄進するという。敬虔な仏教徒とは、かくあるべきか。輪廻転生を基本思想とするタイにおいて、功德を積むことは自身の来世への投資でもある。来世でよりよい生として生まれ変わるため、今世で功德を積むのである。「功德を積むのは自身のため」といわれれば確かにそうかもしれない。それでも私は彼らに尊敬の念を抱かずにはいられなかった。そして、その 2 人のうちのひとり、トンが 7 月に出家した。

出家。それは、国民の 90% 以上が仏教徒を占めるタイ王国において、社会的に重要な意味をもつ。伝統的には、男子は、出家によって初めて「成熟した人」となると考えられたという。出家未経験者は「未熟者」であり、婚姻資格者としても低い評価しか与えられない [石井・坪内 1970]。こうした傾向は、多少の地域差や個人差はあるものの、現在でも多くのタイ人が口にする。実際、タイでは非常に多くの男性が、一生に一度、出家を経験する。

ひとくちに出家といっても、出家する年齢や出家期間はさまざまである。満 20 歳未満で得度して修道生活に入った者を「サーマネーン」、もしくは「ネーン」と呼び、満 20 歳以上で出家した者を「プラ」、もしくは「ピック」と呼んで区別する。どちらを重視するかは地方によってある一定程度の差があるが [石井・坪内 1970]、基本的には出家経験そのものが重視される傾向にある。出家期間は個人によって異なり、2~3 週間程度の短期出家もある。タイでは、一度出家してから還俗することに対して抵抗がない。伝統的には男子にとっての通過儀礼的な意味合いが強かったのである。息子を出家させること

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

が、両親にとって最大の積徳であるとも考えられている。

筆者は、2012年9月から、タイのバンコクに滞在して現代政治史に関する調査を行っている。仏教については専門外であるが、タイ人の友人と付き合いしていると仏教に関心を抱かずにはいられない。タイの出家式については、これまで多くの研究がなされ、また日本人でも短期出家者が多いことから、web上での情報も多くみられる。しかし、それらの多くは主に寺で行なわれる「出家式」に焦点が当てられており、前日の祝賀パーティやその準備の様子については、あまり知られていない。そこで本稿では、出家式につきものの祝賀パーティとその準備過程について、簡単に紹介することとした。

出家期間として最も一般的なのは、雨季にあたる7月からの3ヵ月間である。暦上の雨季の始まりを「入安居（カオパンサー）」、同じく暦上の雨季明けを「出安居（オークパンサー）」と呼び、その日は国の祝日にもなっている。私の友人トンも、この時期に出家した。

トンの出家式に参加するため、私と友人2人は夜行バスでトンの地元であるペッチャブーン県へ向かった。首都バンコクから6時間ほどの距離である。バスターミナルには、トンの母親が車で迎えにきていた。家に到着すると、彼の出家式に合わせて遠方からやってきた親戚や知人が、家中所狭しと眠っていた。

朝7時を過ぎた頃、外がにわか騒がしくなると目を覚ました。自宅前の道路に、特

設ステージを組み立てる人々の声だった。階下に降りてみると、台所はすでに食事の準備をする人々で溢れかえっていた。この時ようやく私は、完全に「出家式」を甘くみていたことに気がついた。とにかくすごい人数なのである。親戚だけではなく、近所の人々が集まって忙しそうにしている。「出家式」は2日にわたって行なわれ、1日目は家でパーティが、2日目に寺院で本当の意味での出家式が執り行なわれる。そのため、家では僧侶を家に招く準備から、ご近所を招いて開催する祝賀パーティの準備までやらなければならない。関係者の人数も膨大だった。

しかし、家事において外国人（しかも都会暮らし）の私は完全に「役立たず」である。見たこともない食材が並び、調理法、ましてや下ごしらえの仕方など全く見当がつかず、最終的に小さなんにくの皮をひたすら剥く係りになった。それ以外、私にできなかった（写真1）。

ひととおり食事の準備を終えてようやく昼食を食べる頃、トンの母親が正装に着替えて出てきた。寺から僧侶がやってきて、人々が家の前に集まりだす。上半身裸で腰布を巻いたトンが現れると、場は厳かな雰囲気包ま



写真1 出家者本人から家事を教わる

れた。断髪式が始まるのである。断髪式はまず、僧侶が経を唱えながら髪を切ることで始まる。続いて、母親、親戚、知人の順に、全員がひとつかみ分、髪を切る（写真2）。彼の髪を切ることが、皆にとって功德を積むことへと繋がるのである。

全員が髪を切り終わると、僧侶が髪を剃り上げる。眉もすべてだ。トンが「僧侶」になっていく過程をまのあたりにして、友人は感動していた。しばらくすると、僧侶の助手をしていたトンの叔父が、おもむろに剃刀をもってきて、すでに髪の毛が残っていないトンの頭を剃り始めた。案の定、皮膚が切れて頭皮から大量に出血し、場は騒然となった。それでもトンの叔父は上機嫌だった。トンが出家することが嬉しくて仕方がないという風で、子どものようなはしゃぎ様である。出血が止まるのを待って、断髪式が終了した。

断髪式が終わると、トンは白い腰布に着替え、頭に頭巾を被り、透明な上着を着た。この格好は、仏陀に出家したいと言った竜（ナーク）の物語に由来する。俗人でも僧侶でもなく、白い衣を身に纏ったナークとし



写真2 断髪式

て、出家前の一晩を過ごすのである。この衣装は、寺で清められた布を使い、トンの祖母が約1ヵ月かけて手縫いした。

トンが簡単なパーリ語經典の暗唱試験を僧侶から受けた後、参列者全員が、僧侶が清めた紐をトンの腕に巻きつける儀式が行なわれた（写真3）。この儀礼は、出家者を祝福する意味で行なわれ、自然に紐が切れるまで、それを断ち切ってはいけない習わしになっている。夕方4時、これで1日目の公的な行事が終了した。

朝から組み立てが続いていた特設ステージが完成したのは、夜6時頃だった。その頃には家の前に仮設のテントがいくつも張られ、綺麗なテーブルクロスが敷かれた丸テーブルが並べられていた。すでに幾人か近所の中年男性が集まって、ビールを開けて談笑している。皆、トンの出家式をきっかけにしたこのパーティを、ずいぶん前から楽しみにしていたという。豪華な手料理と酒が次から次



写真3 祝福の紐

へと運ばれてきて、気がつけば会場は多くの人でにぎわっていた。

夜8時を過ぎた頃には、特設ステージでバンドの生演奏が始まった。朝、この特設ステージを見た時は、一体何に使うのだろうと不思議に思っていたが、まさか余興のためだけに作られたものだとは思ひもしなかった。ステージには、次々にセミプロの地元の歌手が登場した。出家式にともなうパーティなのだから、伝統的な音楽や厳かな雰囲気曲の演奏されるのかと思いきや、始まったのは爆音のタイ演歌（ルークトゥン）である。歌手の女性たちはピチピチのミニスカートに10センチもあるヒールを履いて登場する。見物客からのお捻りが飛び交い、また客も一緒に踊り出す。バックダンサーの女の子たちがあまりに若いので、いったい何歳なのかと思って尋ねてみると、彼らは小学校5年生から中学2年くらいまでの生徒だった。それでも、露出度の高い衣装を身に纏ってファンサービスをする姿はエンターテイナーとしての貫禄があり、十分に観客を沸かせた（写真4）。



写真4 豪華な食事と豪華なステージを堪能する

夜7時から始まった祝賀パーティは、夜中1時をまわっても終わる気配がなかった。パーティ会場の隣にある私たちの部屋の窓は、爆音で割れんばかりに振動し、隣に座る友人との会話さえまならないような状態だった。さぞ近所の人々にとっては迷惑だろうが、この日に備え、トンの母親は同地区すべての家をまわり、深夜までのパーティを開催する許可をもらってきたという。近所の人々も、そのパーティが出家式にともなうものだと知ると、一様に祝福の言葉をかけ、パーティの実施を快諾する。どこの家庭でもほぼ必ず出家式が行なわれるため、互いが持ちつ持たれつの関係であることを、皆が了承しているのである。

結局パーティは夜中3時まで続いた。我々は中座して休んだが、トンは主役だからと最後まで残ったようである。

「こんなに豪華にパーティをしてくれると思ってなかった。」

そう語って涙ぐむトンは翌日、多くの親戚や知人に見守られて、無事に僧侶として出家式を終えた（写真5, 6）。

出家式の準備に立ち会ってみると、この行事が近所付き合いの確認の場になっていることがよくわかる。トンの母親は、祝賀パーティの盛大さは、トン本人へのお祝いの気持ちと、近所の人々への感謝の気持ちを表現していると話す。トンが幼い頃から、近所の人々が子育てに協力してくれたし、トンがバンコクで働くようになってからも、トンを気にかけてくれている。それに対する感謝である、と。トン自身は、地元で出家することが



写真5 母から息子へ、僧衣の献上



写真6 健やかな僧院生活を…

母親や親戚、ひいては近所の人々の功德に繋がると考えている。また、大学生の時から地元を離れたトンにとって、地元で出家することは、身体が地元を離れても、心は留まっていることを示す絶好の機会でもある。将来的に地元に戻ることを考えると、出家式を地元で行なうことの意味は大きいようだ。

一方で、近所の人々にとっては、出家式の

準備に関することは、お祝いの気持ちを示すことはもちろんのこと、そのコミュニティに所属していることを再確認する場でもあるという。準備に参加していた中年女性たちは言う。

「みんなで集まるのは楽しいし、トンに久しぶりに会えるのも、もちろん嬉しい。それにね、こういう準備に参加しないと、薄情者だと後ろ指を指されるんだ。この地域で生活していきたいなら、特に出家式と葬式の準備には積極的に参加しないとね。昔から、みんなそうやって支え合って生活してきたんだから。」

「情報交換の場でもあるよ。みんなの近況を知って、それぞれの悩みや困ってることも言い合うんだ。そうすると、自分が困っている時にまた誰かが助けてくれるんだよ。」

なるほど、男性の人生の中での通過儀礼である出家式。それは出家者にとっても関係者にとっても、自身が「地元」コミュニティに所属する意思があることを周囲に示し、同時に各々の繋がりを再確認する機会としても捉えられているようだ。地元を離れて都会で働く人が増え、また、パーティの形態が現代化するにつれ、出家式を「地元」で執り行なうことの意味は大きくなっているのかもしれない。

引用文献

石井米雄・坪内良博. 1970. 「タイ国における出家行動の地域的変異についての一考察」『東南アジア研究』8(1): 2-15.

一村一品活動

—クルグズスタン・タスマ村の挑戦—

三好弘矩*

クルグズスタンの首都ビシュケクから東に車で半日ほど走ったところにタスマ村がある。この村では村人と JICA 青年海外協力隊の隊員が石鹼作りに励んでいる。

クルグズスタンは自然が豊かであるが、タスマ村では特にそう感じた。村人は馬や牛、羊たちとともに生活し、時間がゆっくりと流れている。村からは美しい山々（天山山脈）が見え、空気が澄んでいる。夜になると満天の星空を拝むことができる。

しかし、この村にもソ連崩壊の波が押し寄せている。400世帯、1,500人ほどの村には学校、病院、役場といった最低限の公共施設しかなく、老朽化が進んでいる。村に水を供給している水道局はうまく機能しない時期があり、しばしば断水が発生する。村には仕事が少なく、それに関連しているのか飲酒が増え、家族や他人への暴力、健康問題を訴える人が多い。クルグズスタンがソ連というひとつの国に属していた頃には、このような問題は比較的少なかったといわれている。そのような中、この村にも JICA 青年海外協力隊の派遣が決定された。

私は2011年のフィールド調査でこの村を訪れ、隊員のNさんに出会った。Nさんは

2010年から2012年まで村落開発普及員という職種でこの村に派遣された。村での活動について尋ねると、「村落開発普及員としての活動内容は、その多くが個人の裁量に委ねられています。私は赴任前から、女性の村人にターゲットを絞り、彼女たちにも手に職をつけてもらうことで生活の安定を図るとともに、より豊かな人生を送ってもらいたいと考えていました。具体的には、一村一品運動の一環である石鹼作りを通じてこれを実現しています」と、強い意志をもって述べた。

2010年5月、村人の女性（主婦）5名と隊員1名によるメンバーが立ち上がった。仕事場の確保と活動資金（資本）の借入れ、石鹼を作るための道具と材料の準備を済ませ



写真1 一村一品のメンバー

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真2 石鹼作りの様子

ると、石鹼の試作が始まった。はじめは通常の石鹼、つまり苛性ソーダを含んだ石鹼を製作、販売していたが、市販の石鹼との差別化を図り、「これぞタスマ村の石鹼」という付加価値を設ける観点から、村で自生しているアラバタという薬草（シロザの一種、日本では薬草というより雑草）を用いた石鹼（アラバタ石鹼）作りをすることになった。この石鹼、もともとは村で広く使われていたのだが、ソ連崩壊後の市場経済化によって隣国の中国から安価な苛性ソーダ石鹼が大量に出回り、衰退していった背景がある。石鹼ひとつを取ってみても、大きな変化を経験しているのだ。

このアラバタ石鹼は生成方法と商品の点でも苛性ソーダ石鹼より優れている。薬草を乾燥させ、燃やした灰（アルカリ性）と牛脂やヤギ油（酸性）を自然に反応させて石鹼を作るので、劇物である苛性ソーダを必要としない。しかも、中性に近い。生産は村人の手作業で行なわれているので、作り手にとっても安心だ。また、苛性ソーダ石鹼のように1ヵ月も寝かせる必要はなく、作ってすぐに販

売、現金収入を得られることのメリットも大きい。この活動の目的は、一村一品という手段を用いて生計を安定させることであり、アラバタ石鹼の登場は理にかなっているといえる。

商品開発に目処が立つと、次に必要なのは販路開拓だ。タスマ村は都市から離れた遠隔地なので、どれだけ良いモノを作っても、売り手と買い手が集う場所、すなわちマーケット（市場）が存在しなければ意味がない。最も近いのは車で1時間ほどの地方都市カラコルで、次に首都ビシュケクが挙げられる。2011年に入ると、カラコルとビシュケクに安定した販路を確保でき、生産量と売上も安定した。

以上がタスマ村での一村一品活動の概要であるが、この主体となったのは誰なのか記しておきたい。この活動（プロジェクト）のアイデアを提供し、マネージメントを務めたのは協力隊員であることに間違いない。しかし隊員は赴任期間中、トップダウン方式で物事を進めることはせず、メンバーが主体となって活動できるよう尽力していた。それには彼



写真3 商品化した石鹼

らにオーナーシップを取らせることで、自立心を養ってもらい、その精神を他の場面でも役立ててもらおうという明確な意図が隠れていた。そんな隊員と一村一品運動を、メンバーはどのように感じていたのだろうか。いくつか列挙しておく。

A氏「タスマ村になかったものが、ボランティアによって持ち込まれ、私たちは石鹸作りの仕事をみつけることができた。私たちだけでなく、次世代にも引き継いでほしい。」

B氏「仕事をもつことで、一日の時間の使い方が上手になり、仕事がなかった時よりも家事をたくさんこなせるようになった。」

C氏「仕事仲間が家族のようになり、なんでも相談できる癒しの場になった。」

ソ連時代、モスクワの指導部による計画経済のもと、構成各国は指示どおりのことをこなし、それに見合った分配を受けていた。それはそれで良かったのかもしれない。しかし、今はもう誰も面倒をみてはくれない。クルグズスタンの国レベルも地方レベルもひとりひとりの国民レベルでも、自分で考えて行動しなければ生きていけないのだ。未だ指示待ち感を拭えないこの国の現状を打開するために必要な「何か」を、私はこの小さな村での活動に見出した気がした。